

日本人としての「アイデンティティ」を失ってはいけない

1990年、日本アイアール社の中に「知的財産活用研究所」を発足させ、世界で通用する「グローバル特許明細書」を作成するために必要な「平明日本語」の運動を性懲りもなく続けている。この「草の根運動」を支えてくれているのが、当研究所の名誉研究員である篠原泰正氏である。彼は私の「師」でもある。今回の寄稿は彼の教えを整理し、いまだに読み続けられている彼の「ブログ」を紹介する。これは名文である。

世界の共通分野での「物・事・考え」を伝えようとするなら、論理的に筋道つけて説明しないと、理解を得られない。即ち、特許明細書の書き手は論理思考を持たねば「グローバル特許明細書」の作成は難しいということ強く訴えてきたつもりである。

誤解されると困るが、論理性と「人間としての正しさ」は必ずしもイコールではない。論理的にものごとを考え、表現する根元の所に、「人間としての正しい心」がなければ、論理的に怪しげなシステムを考え出し、論理的にとんでもない戦略を立案し、論理的に嘘をつく行いが横行することになる。論理的思考と表現能力を身につけることは、人間としての品質が向上することを意味しない。

しかし世界の中で、それなりの役割を果た

NIPTA 理事
日本アイアール株式会社
矢間 伸次

すためには、「面倒だけれど」論理性を身につける必要があるということは理解して頂きたい。つまり日本人としての「アイデンティティ」を失ってはいけないことを理解してほしいということである。

皆さん既に承知しているが、英語は対立の図式で表せる文化の下にある言語である。従って英語で事実報告や考え方や分析された情報を受け取る(主に読む)、英語で表現する、英語で討議するという場合には、英語力が高くなればなるほど、英語を母国語とする人の、この対立の図式の基で、思考や分析、議論を行うことにつながる。

これは、日本人としての「アイデンティティ」や、企業や国という団体の利益保持という面からは、極めて望ましくない危険なことである。実際のところ、英語およびその背景の文化にあるこの対立の図式が、今日の世界における様々な摩擦の原因の一つになっていると言える。

グローバルな環境で英語で戦う戦士たちが、深い経験を積み日本人であることを忘れなければ、そこから初めて、我々の日本式の生き方を、英語を使って表現していく場面が見られるようになって考えている。そのように期待をしている。日本人としての「アイデンティティ」は見失うな、まず日本語を身につけろ、そして英語の力は数段伸ばせ、と相反することを要求することになるが、それは日本人として克服しなければならぬ大切な事項と考えている。

ブログ：「名こそ惜しけれ」：日本の美学の核

若いころ、ヨーロッパで、宗教とはいったい何なのかを考えさせられた。

お前は日本人だから仏教徒かとの質問に、仏教の教えに接したこともない存在としては、「ノー」と答えざるをえない。しからば無神論者なのか、と聞かれると、そもそも神の存在など気にもしたことがないので、神がいるとかいないとかの話には答えようもない。ここらで問いかけてくる相手も私という存在をどのような範疇に当てはめていいのかわからなくなるし、こちらも、神がいようがいまいがどうでもいいではないか、なぜそのような「些細」なことにこだわるのか、とこれまた西欧人の考えに理解が及ばない。

キリスト教を信じる彼らにとって、信じる宗教を持たない人間は野蛮人であるか、あるいは得体の知れない存在とみなすということは、既にいくつもの書物で承知はしていたが、自分はなぜそうなのか、宗教なしでも別に何の支障もないことを適確に表現することはできなかったし、彼らがなぜ宗教なしの人間を

理解する基礎を持っていないのか、理解できなかった。

後になって、司馬遼太郎さんの本を読むことで、問題のひとつは解決した。

司馬さんがどのように記述されていたか、確かではないが、宗教は獰猛な人間を飼いならすために必要とされるという言に出会って、霧が晴れた。彼らには宗教が必要であり、自分たちが必要としているから、相手も必要としているに違いないとする。だから宗教を持たない存在は、自分たちが宗教を持たなかった時の状態と同じく「野蛮」であり、だからこの「福音」を伝授したいという、お節介になるわけだ。

ところが、日本人は、宗教なしでも別に獰猛でもなく、野蛮でもなく、近代文明も受け入れているし、知識教養も高く、礼儀も正しい。いったいどうなっているのだ、ということになる。

ここまで書いてきたようにこの疑問に当時は、私は答えられなかったのだが、今ならできる。

われわれ日本人は、人間存在の基盤に、「名こそ惜しけれ」という美学を持っているからこそ、キリスト教を信じる西欧人や、そのほかユダヤ教、イスラム教、ヒンズー教等を信ずるどのような人々に対しても、同じ土俵で毅然と相対（あいたい）することができるのだ。

「名こそ惜しけれ」とは、いうまでもなく坂東武者の中に育った「美学」であり、生きるうえでの基本基準とでもいうべきものである。もちろん宗教ではなく、また哲学という

概念にもあわない。この概念を定義するのは難しいので、私はこれを「美学」と呼んでいる。生きるうえでの、美意識に関する感性に基づき、基本的な姿勢とでもいっておく。

鎌倉時代から、現日本の原型は形作られたのだから、その社会におけるエリート層の武士の美学は次第に日本人全体のものとなっていく。「名こそ惜しけれ」自分の行うことには自分が責任を持つ、ということである。恥ずかしい仕事はできないということである。自分の名にかけて、物事はキチンとやるという自意識を高く持った誇り高い存在を支えている美意識なのだ。

農民が作る農産物、職人が作る制作品、これらを見れば、日本人は庶民の隅々までこの「名こそ惜しけれ」の美学を持っていたことがわかる。日系移民という、高等教育を受けたわけでもなく、熱烈な仏教徒でもない普通の民衆が海外の地であれほどの評価を得たのも、この美学が根底にあったからに違いないと私は確信している。

この美学は、戦後、高い品質の工業製品を生み出す原動力にもなった。工場の現場の一人一人が無意識であってもこの美学を持っていたがために、自分が関係した製品

は、恥ずかしくないものを市場に出すのだという信念があった。今もあるはずだ。

今なら、私は、外国の人々に説明できる。俺たちには「名こそ惜しけれ」の美学があるから、宗教はなくとも、まともな行動が取れ、まともな社会を経営することができるのだと。

ただし、外国語で、このことを説明するのは相当に難しい。あれやこれやの実例を示しながら説明していかないと、理解を得るのは大変な作業となるだろう。

ともあれ、われわれ日本人がこの「名こそ惜しけれ」を忘れない限り、というより、まだ維持している人々が先頭に立って行動すれば、21世紀のこれからの困難な局面において、世界のパスファインダー (pathfinders) として尊敬を受け、世界の存続に貢献できることになるだろう。

論理の展開の根底にはまともな哲学、人間とは何、どうあらねばならないかの原理原則がなければならず、幸いなことにわれわれはその原理を「名こそ惜しけれ」という一言で表現されるもので持っている (2006/01/01: 篠原泰正)